

歴史館だより



- 光明寺本『遊行上人縁起絵』をめぐる謎を解く
- 最上義光像が建つまで
- 最上義光歴史館サポーター「義光会だより」No.4
- Yamagata三昧「街道を少し離れて歩くこと」
- 研究余滴⑭「義光の辞世」

No.21
2014年3月発行



最上義光歴史館

光明寺本

『遊行上人縁起絵』

をめぐる謎を解く

松尾剛次

山形市にある時宗寺院光明寺には、寛永八（一六三二）年七月十五日付で最上家信（義俊、義光の孫）によって寄付された国の重要文化財紙本著色『遊行上人縁起絵』十巻がある。それは時宗の開祖である一遍の伝記を絵と詞で書きあらわしたもののだが、第二祖の他阿真教の伝記も書かれている。ただし、一遍の伝記は四巻分に過ぎず、他阿真教の伝記に六巻分が宛てられている。本絵巻のオリジナルは、一遍（一二三九―一二八九）の弟子であるとともに、第二祖他阿真教の弟子であつ

た宗俊によって、嘉元二（一二三〇）年から徳治二（一二三〇七）年の間に制作されたと考えられる。一遍の十三回忌を意識して制作されたと考えられている。

『遊行上人縁起絵』は、異本が多く制作されたが、鎌倉時代末の原本はなくなってしまう。とりわけ、光明寺本『遊行上人縁起絵』は、鎌倉時代末の写本（藤沢清浄光寺旧蔵、明治時代に焼失）を狩野宗秀が書写したものである。本絵巻は、十巻で全長がほぼ一七〇メートルという浩瀚なものであるが、近年、『一遍聖絵』十二巻とともに、日本美術史、仏教史研究などにおいて大いに注目されてきた。



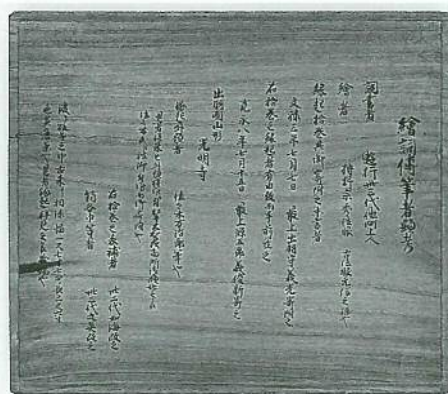
光明寺（山形市）



光明寺本『遊行上人縁起絵』と外箱

本絵巻には、各巻に奥書がある。それによれば、（一）本絵巻は狩野永徳（一五四三―一五九〇）の実弟である宗秀（一五五一―一六〇一）の手になること、（二）最

上義光が制作させ、文禄三（一五九四）年七月七日に一旦は光明寺に寄付したが、理由があつて、寛永八年七月十五日に再度、義光の孫である家信によって再び寄付されたこと、がわかる。寛永八年七月に再び寄付した家信は、その年の十一月二十二日に二十六歳で死去している。狩野宗秀は兄の永徳に比べて有名ではないが、織田信長像を描くなど当代を代表する絵師で、とりわけ文禄三年当時は、永徳は亡くなつており、狩野派の代表者であつた。また、全十巻を納めた箱に記された箱書きの「絵詞伝筆者頭考」によれば、詞書きの筆者は遊行三十三代他阿上人すなわち時宗総本山清浄光寺の満悟上人であ



外箱箱裏



巻第三奥書部分

るという。満悟は天正十七（一五八九）年に第三十二代普光から遊行上人の位を引き継いだ。当時において時宗の最高指導者の立場にあつた。

ようするに、本絵巻は、中世から近世への過度期にあたる戦国時代に制作されたものである。ことに、最上義光は慶長十九（一六一四）年に亡くなつたので、二〇一三年は最上義光の没後四百年にあたる。本絵巻は、平成元年に奈良国立博物館に寄託され、普段は見ることが困難であるが、義光没後四百年を記念して里帰りし、史上初めて、全巻が山形市の最上義光歴史館で展示・公開された。フル・カラーの図録『重要文化財光明寺本遊行上人絵』（最上義光歴史館、二〇一三）も作成され、販売されている。

依頼主の最上義光は、激動の戦国時代を生き抜き初代山形藩主として五十七万石を領した。その財力をもとに、義光は東北有数の大名として栄華を極め、南部の置賜地域を除く現在の山形県域と秋田県南部を領した。光明寺本『遊行上人縁起絵』も、いわば義光の栄華の産物の一つである。

ところで、本絵巻には謎が多い。そもそも、なぜ最上義光は文禄三（一五九四）年七月七日に光明寺に寄付したのかという理由がはっきりしなかつた。光明寺は、最上氏の祖とされる斯波兼頼（一三一五―一三七九）が隠居して開いた寺院である。祖師絵伝などの制作は、通常、遠忌を期する場合が多い。たとえば、『遊行上人縁起絵』と別系統の『一遍聖絵』は、聖戒が一遍の十回忌に合わせて作成したものである。それゆえ、まずは光明寺の開基斯波兼頼の遠忌にかかわるのかと思われる。

しかし、斯波兼頼は康暦元（一三七九）年六月八日に死去しているので、年月日とも関係はない。そのため、謎とされてきたのである。そこで、次に注目されるのは、光明寺の方で、そういう寺宝を贈られるに足る盛大な祝儀があったのではないかということである。たとえば、建物が新築されたとか、新住持が入ったといったことだ。実際、そういう目で光明寺の歴史を見直してみると、きわめて興味ぶかいことがわかる。

光明寺は、永和一（一三七五）年に、斯波兼頼の跡を継いで山形城主となった直家が、応永七（一四〇〇）年に引退し、城内にあった兼頼の庵を隠居所として「遍照山光明寺」と名付け、寺院にしたという。

ところで、光明寺の歴史を書いた『光明寺由来記』というものが光明寺にある。それによれば、「光明寺十七世俊山和尚が、文禄年中に当所に引き、開山兼頼公尊骨ならびに代々の遺骨を移し、今霊屋を建てる」という記事があるのが注目される。光明寺は、かつては城内でも本丸内にあつたが、第十七世の其阿俊山の時代の文禄年中（一五九二―九六）に、本丸内を出て、山形城東門の前に移転したという注目すべきことがわかる。また、兼頼および代々の遺骨も移し、霊屋を建てたという。それゆえ、文禄年中は、光明寺が、本丸から二の丸内であつて、本丸東門の前あたり（現在の最上義光歴史館あたり）に移転し、御廟所も新築されるといふ画期的な時期であつたのだ。

また、光明寺の『光明寺世代記』によれば、其阿俊山について、当山の一騰として、天正十九（一五九二）年よ

り慶長六（一六〇一）年まで十一年居住したことがわかる。また、光明寺に伝わる文禄三年一月二十八日付けの最上義光が光明寺に宛てた書状も注目される。それによれば、最上義光は、住職が寺領を直々に支配されるのは尤もであることと、在家（家を指定して、そこから寺役を取る権利を認めた）も住持の支配下にあるべきことを認めている。最上義光は、光明寺が本丸を出て新築されるに当たって、最上家の直轄の寺院から、寺領・在家を与えられた独立した寺院への転換を認めたのであろう。光明寺は、一七六〇石の寺領をもらっている。

さらに、注目されるのは、文禄三（一五九四）年五月に以下のような禁制が下されている。

- 一、寺中狼藉の事、
- 一、殺人不入の事、
- 一、山林竹木猥りに伐採する事

右の条条堅く禁断せしめ候、もし、違犯の輩これ有らば、罪科たるべき也
文禄三年五月

最上家の城（山形城）の本丸内にあつた時には、寺内狼藉や殺人の乱入、竹木伐採などのことを心配する必要がなかった。しかし、本丸の外に出れば、そうした心配が出て来ることになる。

以上のような記録、書状、禁制などから判断すれば、光明寺が本丸を出ることになった文禄年中とは、文禄三年頃で、とりわけ、禁制が掲げられた五月頃には建物は建設されていたことになる。とすれば、文禄三年という年次が寄付の年次として選ばれたのは、光明寺の本丸から東門前の地への移転に

よる新築という一大慶事があつたからであろう。

つぎに問題となるのは、兼頼の忌日である六月八日ではなく、七月七日にしたのはなぜであろうか、である。七月七日は七夕の節句の日である。それゆえ、七夕の節句に合わせて寄付したと考えられる。しかし、重要なのは、七月七日という日は、民俗上は精霊を迎えるための準備をする日とされている点だ。『日本史大事典』（平凡社）によれば、七夕とは、民俗的には、盆の一部で、祖霊を迎える盆祭の準備をする日であつた。

とすれば、本丸から、兼頼以下の代々の骨を移し、御霊屋を作った光明寺にとつて、七月七日はお盆入りの先祖供養に最適な日付けであつたことになる。もっとも、推測に過ぎないが、七月七日は、兼頼の忌日である六月八日に近く、その日に間に合わせようとしたが、結局、納入が遅れてしまったのかも知れない。そのため次善の策として七月七日にしたのが本当の理由かもしれない。

次に問題となるのは、なぜ寛永八（一六三一）年七月十五日付で最上家信が再び寄付を行ったかである。先述の『光明寺由来記』によれば、光明寺は無住になった時期があつた。俊山は慶長六（一六〇一）年まで住職を勤めた。その跡を受けて、慶長六年には、当代一の連歌の名匠一華堂乘阿が住職となつたが、慶長十（一六〇五）年に京都へもどり金光寺へ入つたという。そのため、それ以後、光明寺は寛永三（一六二六）年までは無住となつた。とりわけ、元和三（一六一七）年三月八日には山形の大火により、光明寺も焼失

した。そこで、元和三年から寛永三年までの遊行上人廻国の際に、いったんは家信に返されたところである。

ところが、家信は、寛永八（一六三三）年七月十五日付で再び寄付を行ったのは、寛永三年には新住持も入つたので、盆である七月十五日に再度、寄付することにしたのであろう。また、寛永七（一六三〇）年は義光の十七回忌なので、それも意識していたかもしれない。



略歴

松尾剛次 (Matsuo Kenji)

一九五四年 長崎県雲仙市愛壽町に生まれる
一九七七年 東京大学文学部国史学科卒業
一九八一年 同 大学院人文科学研究科国史学専門課程博士課程退学
一九九四年 同 大学院人文科学研究科より博士(文学)の学位授与
二〇〇二年 ロンドン大学アジア・アフリカ研究所(OAS)客員教授
二〇〇三年 東京大学C・O・E特任教授
現在、山形大学文学部教授。鎌倉新仏教を中心とした日本宗教学史・日本中世史を研究している。

【著者】

『お坊さんの日本史』NHK出版二〇〇二年
『破戒と男色の仏教史』平凡社新書二〇〇八年
『知られざる親鸞』平凡社新書二〇一二年 など

最上義光像が建つまで

西村 忠

齢八十六歳を数える身は、年とともに物忘れが酷くなるばかりで……依頼の霞城公園に建つ最上義光像がどうしてできたか？何を表したかったか？施主の鈴木傳六先生（株式会社でん六の創業者）の意図や製作者としての思いをどこまで遡れますか……。

傳六先生から呼ばれて金田忠氏（山形市銅町の西村工場常務）と山形の先生のご自宅に伺ったのは、昭和も半世紀を過ぎたころでした。

「これからの山形市の観光の目玉にするべく最上義光公の像を造りたい。世界に類を見ない後脚二本だけで立っている騎馬像だ。三点で建つ安定した馬は世界中数多くあるが、二本脚で建つ馬はヨーロッパでも観たことがなかったんだ。なんとか研究してやってくれないか？」と……。

私は四十代でした。東京に帰って来たものの試行錯誤ばかり。時間が経つばかり。山形市郊外の大森地区の馬が私の構想のモデルに適用するのは？と教えてくれた人があり、高島まで出向いたこともありました。

馬を目のあたりに観察できたことは、大変良かった。作品に勢いと臨場感を育んでくれた様に思います。

最上義光公の遺品が高野山にあると

聞いて、傳六会が企画した団体旅行の中で、高野山に参内して指揮棒を拝見してきました。迫り来る上杉軍を馬上より指揮して迎え撃つ義光公！その勇姿と気迫に明日の山形を重ねた構想・製作意図を全うさせたかったのです。一番難しかった構造は、重心と重量をできるだけ中心に集めることで、なんとか凌いで、西村工場の金田常務と何度も打ち合せし、先ず十分の一の模型を作ってみました。

とりあえず二点（前脚を上げて）後脚だけで支えた最上義光公の馬上姿が頭れました。



騎馬像 石膏原型

すると、傳六先生は、東京の我家まで飛んで来られ、ああでもないこうでもない日がある一日、飽きもせずその模型を手に掛け弄っておられました。そのお姿はいまでも臉に浮かびます。

結局、構想を固め、石膏模型（十分の一）が出来るまで一年、それから実物大原型（石膏）の製作と铸造するの一年、二年懸かったでしょうか。建立は昭和五十二年秋十一月三日でした。一番厄介だった二点（後脚）だけで支える馬上姿の構造の基本は、西村工場の金田常務の設計部がすっかりやってくれました。铸造製作は「おてのもの」といいながらも、馬具や兜の紐、鎧にいたるまでの細かい細工は、みなそれぞれ思いを凝らしてくれました。原型製作についてもそれぞれの部署で協力してくれました。



建立からやがて四十年になります。長い間には地震もあれば、思わぬこともありました。像は指揮棒を振っているのに、槍を揮い敵を倒さんとする軍国主義の象徴だ、と街の文化人と称する人に反対されたり。一部分壊された

り。花見の若者に兜の紐を切られたり。それでも、今日も霞城公園で山形の礎を築いた最上義光公は「山形の明日」に向って走っています。



除幕式で鈴木傳六先生と作者

二本足の馬に未来の山形を託した鈴木傳六先生は、鬼籍に入られました。私もやがて去り逝く身です。この二本足で建つ最上義光公像をつくらせていただいで、本当によかった！ありがとうございました。

（金属造形作家／日展参与）

昭和五十二年十一月三日建立

・銅像創案

鈴木傳六

・原型製作

西村 忠

河原 明

室岡正明

南 康弘

秋保貞朗

・铸造製作

西村利雄

・協力

山形県铸造協同組合

・銅像建立

山形県铸造協同組合

・銅像設計建立

最上義光公顕彰会

・庭園設計台座設計

本間利雄

※写真提供／株式会社西村工場

義光会だより

No. 4
2014年3月



題字 齋藤蕉石

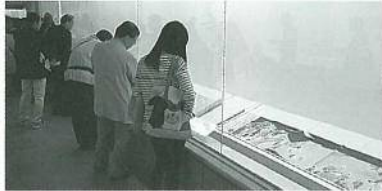
義光公没四百年の活動

今年には義光公没四百年にあたり、歴史館や市では様々な記念事業が開催されました。その目的は「最上義光」の向上です。市民に愛される義光像を作っていくというものです。義光会も、主活動の館内案内はもちろん、それらの事業に積極的に参加することで、義光公の業績・人となりさらには多くの人に知ってもらおうと活動した一年でした。

春、記念年の開始セレモニーには、義光公に扮した会長を筆頭に大勢の会員が参加し会場内のお客様に歴史館の宣伝を行ったり、山形まるごとマラソンでは甲冑姿でランナー達に声援を送り、大会を盛り上げました。他に行われた様々なイベントにも、義光公になりきり参加しました。特に、十月の最上軍パレードでは、義光公とその家臣団を再現することで、四百年前に山形を統治した最上家の存在を市民や観光客の方々にアピールできたと思います。



義光公とその家臣団が七日町をパレード！



美しい絵巻にたくさんの方が来場しました。

満足して帰られるよう誠実な活動を積み重ねていきたいと思っています。

さて、もう一つ、今年には大きな企画展がありました。「二遍上人絵」全巻展示です。これは、義光公ゆかりの絵巻物です。

第一展示室に展示された絵巻は大変美しいものでした。四百年以上たっているとは思えない色彩の鮮やかさ、当時の人々が生き生きと描かれている様子には目を見はりました。会期中は様々な先生方のお話を聴くことができ、絵巻や宗教という分野の勉強にもなりました。また、来場くださったお客様と一緒に鑑賞できたことで、時間と感動を共有しあうというガイドの原点に立ち返ることができた気がします。

「ヨシアキ☆すくすく!?」の取り組み

三年目に入り、子ども達の来館や校外学習で訪れる学校の増加など、ヨシアキすくすくも定着してきました。

今年はこのメンバーで、四百年事業の一環として親子対象の講座も夏と冬に開催しました。テーマである義光力の向上とともに、義光公が親子共通の話題となり、家庭でも自然に山形の歴史の話ができる



「そうなんだあ」親子で納得 (親子講座)

ようになってほしい、そんな願いです。

これらの活動は地道に続けることが実を結んでいくのだと思いますが、親子で来館し子どもが親に説明している姿や、ボランティアの話に自分の感想を述べたり質問をする姿に、確かに実りつつあると感じています。義光公に関する知識・理解とともに、当時の人々に思いを馳せることができる子ども達に育ってくれるよう、継続した取り組みをしていきたいものです。

会員の資質向上のために

由利本荘への研修

今年度は、スキルアップ講座や四百年記念の企画展示に関連した研修の他、由利本荘への現地研修を行いました。

由利本荘は長谷堂合戦後、最上領となつた地です。現地に行つて実感したのは、庄内と秋田はつながっているということです。義光公は庄内・由利本荘を新たな発展拠点と捉えていたかもしれないと考えさせられました。最上領としての由利本荘、そこでの最上家の動向については今後さらに研究が進められると思います。最上家の新たな発見が期待される場所かもしれません。

私達一行を暖かく出迎え、丁寧な資料と説明をしてくださった由利本荘の皆様には、深く感謝申し上げます。



本荘城三ノ丸城門跡

編集後記

四百年記念にあわせて、たくさんのお客様が来館し、私達も良い交流ができた一年だったのではないのでしょうか。今年、義光会では義光公が愛した桜を植樹しました。この樹が根付き、花を咲かせ、これからの山形の発展を百年、二百年と見守り続けていくことを願います。(益子)

○平成25年度事業・最上義光公没後四百年記念事業スナップ



○大盛況!! 松尾教授のギャラリートークと特別展テープカット

○義光会
甲冑三人衆!!



○市川“義光”市長
VS
義光会阿部“義光”会長



○最上軍パレードに参加した歴史館サポータークラブ「義光会」のみなさん



○最上義光公四百回忌法要(於 光禅寺)



○満員御礼!! 記念シンポジウム

※最上義光歴史館の最新情報は
公式ホームページをご覧ください。
<http://mogamiyoshiaki.jp>



○歴史館別注の虎将駒を提供した子供将棋大会



○寄贈された豪華な記念着物

「街道を少し離れて歩くこと」

リサ・ソマーズ

日本に暮らす外国人である私にとって、200年近く前にイギリスで生まれた女性イザベラ・バード(1831-1904)は、今の山形を知ろうとするときにも意外なほど参考になります。

病弱ながら大胆な紀行作家として名をなしたバードは、1878年6月に来日し、日本人通訳と北海道までの二人旅をはじめます。日本滞在中は順風満帆ともいえなかったようですが、日光、新潟を経て7月には山形にたどり着きます。新庄では寝苦しい夜を過ごし、「鼠が私の編み上げ靴をかじったり、私が食べる胡瓜をもって逃げていったりした」と嘆くバードですが、山形については全体にいい評価をしています。「非常に繁栄し、進歩的であり、前途有望という印象を受ける」といったり、米沢平野を「まさしくエデンの園」や「アジアのアルカディア」と形容したり、鳥海山や湯殿山を含む山並みを絶賛します。

体験談の内容や当時の絶景の記述も興味深いですが、しかしそもそもなぜバードが、明治10年の西洋人にとっては基本的に未知で、旅行者用地図さえも乏しい土地をあえて旅したのか気になります。そしてその答えは、日本滞在中の様子を伝えた手紙を帰国後にまとめて出版した『Unbeaten Tracks in Japan』の書名自体にうまく要約されています。『日本奥地紀行』と訳されることが多い書名ですが、直訳すれば「踏みならされていない日本の道すじ」となります。強い精神力と好奇心を持ったバードが、大きな街道を避けながら一期一会的な体験を求めた気持ちがよく伝わります。

私自身の体験を振り返ってみれば、海外でもよく知

られた京都や東京のような都市ではなく富山県の魚津市に20年近く暮らしたのち、更に北上して山形に来てから今年で5年目。山形に来て間もなく2011年には、西洋ではほとんど知られていない最上義光について記された『最上記』を英語に全訳する機会を得ました。最上義光に関する英語資料の少ないのが、当初翻訳のプレッシャーでしたが、いつの間にかそれも最上義光を西洋に伝えるために一本の新しい道歩んでいる、という面白さに取って代わりました。仕事の面でも日常生活でも、踏みならされた道ばかりではなく、ひとの歩きそうにない道すじを踏むことではるかに豊かな山形体験ができそうです。

イザベラ・バードの来日から百年以上経った1988年に、山形の市民グループ「風」が英語ガイドブック『YAMAGATA』を刊行しています。その冒頭には、1961-66年に駐日大使を務めたエドウィン・ライシャワーの「山の向こうのもう一つの日本」と題したエッセイがありますが、その文章の最後でライシャワーもまた、日本を訪れる外国人に「踏みならされた道 (beaten path)」を一步離れて山形を訪れてみるよう強く勧めています。

今の山形はバードやライシャワーの頃とはもちろん違います。しかし、当時といくら変わっても、通ってみるべき「踏みならされていない道」が山形にはまだまだありそうです。(『日本奥地紀行』引用は金坂清則氏訳)

Lisa Somers (リサ・ソマーズ) 翻訳者・通訳/山形市在住

平成25年度事業

展示事業

○企画展 《4月1日から同月7日 前年度継続》
「市民の宝モノ2013」

○常設展示Ⅰ 《4月9日～7月15日》
「鐵 [Kurogane] の美2013」 ～ 郷土の刀工たち ～

○肖像画の特別公開 《4月20日～5月19日》
「坂紀伊守像」「坂重内光重像」「北館大学助利長像」

○常設展示Ⅱ 《7月27日～9月11日》
最上義光没後四百年記念企画展示
「最上義光と連歌」

○常設展示Ⅲ 《11月14日～1月13日》
「屏風絵の四季彩」
～ 初公開 最上義光等連歌巻「賦何船連歌」～

○企画展 《1月16日～4月6日》
「市民の宝モノ2014」

普及啓発事業 (主な事業)

○こども講座

「ヨシアキ☆すく〜る!?!」—— 山形の殿様、義光公を知ろう! ——
講師/最上義光歴史館サポータークラブ「義光会」

- ・ 7月10日 山形市立第十小学校 四年生
- ・ 10月22日 山形市立第四小学校 四年生
- ・ 10月29日 山形市立第五小学校 六年生
- ・ 11月19日 山形市立第二小学校 四年生
- ・ 11月21日 山形市立第八小学校 四年生
- ・ 12月12日 山形市立第一小学校 四年生

○特別事業 (最上義光没後四百年記念事業)

○特別展 《9月14日～11月10日》

「重要文化財 光明寺本『遊行上人絵』」
～ 最上義光没後四百年記念全巻公開 ～

○最上義光公没後四百年記念誌刊行業務

「最上義光公没後四百年」
～ その生涯と事績 ～ 刊行



研究余滴④ 義光の辞世

長谷勘三郎

最上義光が亡くなった日は慶長十九年一月十八日。太陽暦では二月二十六日。余寒なお厳しい時節である。晴れた夜なら満月に近い月は、冷たい光を地上に投げかけるだろう。

さて、石川県金沢市の研究者から、歴史館に一通の封書が届いた。『政隣記』という古記録の一節をコピーして届けてくださったのだ。

「一 最上駿河辞世并詠歌

一生居敬全 今日命帰天
六十余霜事 对花拍手眠
有といひ無しと教へて久堅の
月白妙の雪清きかな

先様の疑問は、これが確かに「最上駿河守家親」の作だろうかということのようであったが、家親なら、元和三年没、三十六歳であるから、「六十余霜」とは合わない。亡くなったのは三月六日（太陽暦四月十一日）とされているから、春爛漫ではあつても、「久方の月の光、白妙の雪」といった景物からは程遠い。さらに亡くなる前二晩ほど苦しんだとする記録もあるのだから、月雪を称賛し、花にまで感謝しながら命終を迎えるという境地には到底なりえないだろう。

間違いなく、この辞世二編は、最上

義光の作と見てよい。

そこで、作品そのものを見てみよう。まず漢詩。読み下しと、その趣意。

「一生の居、敬をまつとうし、今日、命天に帰る。」

六十余霜のこと、花にむかい拍手して眠らん」

趣意。
「自分の一生は敬いと慎しみを貫いてきた。」

今日、わが命は天に帰る。

六十余年を顧みれば多事多端。美しく咲いた花に拍手を贈つて、

わたしは眠ろう」

生涯を振り返つての満足感と、折々に自分を慰めてくれた花への感謝。

次に和歌。「久堅の」は、「久方の」と書かれることが多い。解釈上は「白妙の」は、懸詞と見るのがよいようだ。

難解な和歌だが、以下は筆者の解釈。有りといえはある。無しといえは

ない。そう教えてくれる月の光の白さ、白妙の雪の清らかさ。はたして実体は何なのか。

自然そのままでありながら、この上なく清らかで美しきもの……。

真実の姿は知れなくても、義光は死の直前まで宗教的存在とでもいうべき

「美」を見つめていたのである。『政隣記』義光辞世の直前には、細川幽斎と

沢庵和尚の詠歌各一首が記されている。

平成26年度事業

1. 展示事業

(1) 企画展

①「市民の宝モノ2015」展(継続企画)(1月-4月)
山形市民を対象に、所蔵する「宝モノ」を募集して、歴史館で選考して展示し、広く一般に公開する市民参加型の展覧会です。

(2) 常設展示

最上義光を中心とした最上家関係資料と山形城関係資料、山形に関わる文化財などを展示紹介しながらテーマを定めて一部コーナー展示を行います。

①「武士 [ronin]」の晴れ姿
(4月8日-7月21日)

②「鑑 [urogane]」の美[uray]」武士と日本刀」
(7月-11月)

③「(仮称) 山形大学附属博物館の古文書展」
(11月-1月)

(3) 特別公開

①最上家臣の肖像画(4月16日-5月18日)
最上義光の重臣坂紀伊守光秀、二代坂重内光重、北館大学助利長の肖像画を公開します。

2. 普及啓発事業(主な事業)

(1) 歴史講座

①こども講座「ヨシアキ☆すく〜る!」
山形市内の小学校に出向き、郷土の歴史に触れる機会をつくり、郷土史に対する関心と理解を深め、愛郷心を育てる一助とします。

②親子歴史講座

夏休み・冬休みの期間に歴史館を会場にして親子で最上義光を中心に郷土の歴史や文化を学ぶ機会をつくり、郷土史に対する関心と理解を深める一助とします。

(2) ボランティアに係わる事業

最上義光と最上家を啓蒙することについて歴史館とともに活動する市民が、ボランティアという形で歴史館のサポーターとなつて、来館者の多様化するニーズに応え、きめ細かなサービスの提供を図るとともに、歴史館を核としたコミュニティを創出します。

※詳細については最上義光歴史館へお問い合わせください。

表紙の写真

最上義光は慶長十九年(一六二四)一月十八日未刻(現行歴二月二十六日午後二時頃)六十九歳で山形城に没しました。平成二十五年は最上義光が没してから四百年の記念の年です。四月のオープニングセレモニーから翌年二月までの約一年間に様々な記念事業が実施され、山形市を挙げての一大事業となりました。特に十月十二日と十三日に開催されたよしあきフェスタは大盛況で、最上義光に対する市民の関心も一層高まったことでしょう。写真は山形市長、副市長をはじめ市議会議員、市役所職員他、歴史館サポーターなど総勢二百六十二名が参加した最上軍パレードの記念撮影です。

「利用について

開館時間 午前9時から午後4時30分
入館料 無料
休館日 月曜日(国民の祝日となる場合はその翌日)
12月29日から1月3日
交通 J R山形駅より徒歩約15分
大手町バス停留所より徒歩1分

来館案内図



平成26年3月発行
編集・発行 公益財団法人山形市文化振興事業団
最上義光歴史館
〒990-0004
山形市大手町1-153
023-1625-17101
023-1625-17102
http://rogamtyoshiki.jp
印刷 株式会社大風印刷

